

たかが校正，されど校正

安 藤 勝

「たかが校正，されど校正」。よく使われる言葉です。

誰が言い始めたのか分かりませんが、言い得て妙です。うまいことを言ったものです。

「校正」とは改めて説明するまでもありませんが、多くの人は校正での苦い経験をお持ちでしょう。ゲラ刷りと原稿を照合して、誤植、誤字、脱字、表記の訂正、用語の統一などをチェックして修正します。初校、二校、場合によっては三校もあります。

印刷ができあがったとき、緊張が走ります。恥をさらすことにならないか。活字になる喜びと同時に、不安感が募ります。

私の今までの経験から、完全無欠な校正は神業だということです。誤字、脱字は必ずあるという認識が必要です。校正ミスを防ぐためには時間をおいて再度見直すか、音読することも効果的です。原稿の逆読み（下からの校正）もいいと言う妙な人もおります。

▼校正は自分だけで校正すると得てして危険信号です。先入観があるからです。第三者に見てもらうことも必要です。最近「奥羽大学付属病院」とある文章に書きました。これを見た人から早速連絡が入りました。「奥羽大学付属病院」ですとお叱りを受けました。たかがですが、されどです。

▼「奥羽大学報」で誰も気が付かなかったことがありました。私の書いた記事でしたが、後悔のしようがありません。印刷ができて配付されてしまったからです。奥羽大学そばに池があります。善宝池です。これを善方池と書いてしまったのです。後日、ある人から指摘されました。校正の編集会では誰も気がつかなかったのです。13人の委員が居てもです。たかが校正，されど校正と言いたいです。

▼校正で大失敗をしたことがあります。私が最初に就職した職場は新聞社でした。新人は最初校閲課に配属されます。赤ペンを持ってゲラ刷りとにらめっこです。ここで校正作業をしながら、新聞作りの研修をします。つぎに整理課で紙面作りを経験します。通常は午後から夜にかけての仕事です。朝刊は夜の産物だからです。整理課に刻々と送られてくるニュースの価値判断をし、見出しをつけて活字を組む工場へ回します（そのころはまだ活字を使っていた時代でした）。編集は一人で一面を担当します。私が第二社会面を担当した時、ある記事の見出しに「ツベルクリン」という文字を付け、キャップも点検OKで輪転機に回付しました。今日の仕事はこれで終わり、やれやれの気分仲間といつもの店に行きます。一杯飲んだその時、電話が入りました。「ツベルクリン」ではなく「BCG」だ。今、輪転機を止めたから、すぐ社へ戻れ。翌日、キャップは始末書を書きました。私は新人ということで頭を下げただけでした。

▼『国書解題』（佐村八郎著）といえば、上古から江戸時代末までに日本人が著した著作2万5千部の解題書として斯界のひとにとってはあまねく知られている有名な書です。出版年が大正15年（復刻版も出ていますが）ということもあり、今では利用する人はほとんどありませんが、『漢籍解題』（桂五十郎著）とともに解題書の双璧を成した本です。

この書のある大学図書館が製本しました。よく利用されたので、本が破損したのです。製本するとき、製本業者が背文字を『図書解題』とうっかりまちがいました。背文字が間違っていることに誰も気が付きません。書架に収まるともともとこの本は『図書解題』という書名であるかのように、学生のレポートにも『図書解題』を利用したと書かれる始末です。

たまたま私が気が付き、背文字を直してもらいました。たまたまです。得てしてこういうたまたまが間違いを発見するようです。校正恐るべし。厳密に言えば『國書解題』でした。

▼ある大学出版局から浩瀚な学術図書が送られてきました。いわゆる寄贈図書です。気軽に読めるような本ではありません。商業出版として流通しそうな非売品です。数日後に数ページにわたる正誤表が送られてきました。しばらくそのままにしておいたところ、再び正誤表が送られてきました。最初に送られてきた「正誤表」の「正誤表」でした。誰か校正を手伝う人はいなかったのかしら。老学者が渾身を込めて著作した学術図書でした。

▼はるか昔、奈良・平安時代のこと。仏教が盛んになり、多くの経典が作られました。当時は今日のような印刷技術がありませんから、本は写本として作成され流通しました。天武天皇の二年、写字生たちが一切経を川原寺で写経したと『日本書紀』に見えます。奈良の都に写経所が設けられ、国費をもって生産されました。写経所には長官の下に人事、写経料紙、筆、墨、給料、食事など一切の事務担当者がおり、専門職として書写に従事する経師、書写されたものの校正に従事する校生、写経された書画の表具を行う装潢師などがおりました。一卷の書写が終ると、校生が一校、二校、三校と校正を行い順次作業が施され一卷の写経が出来上がります。おもしろいことに、校正に誤字、脱字があった場合、誤字五字を以って一文、脱字は一字につき一文という規定もあったようです。小野則秋著『日本文庫史研究』に書かれてありました。

▼西洋でも、特に中世の修道院では写字生たちが、盛んに聖書を生産しました。モンテ・カシーノ修道院、ヴィヴァリウム修道院、ポピオ修道院、ザンクト・ガレン修道院などが写本生産で有名でした。修道院には書写室（scriptorium）が設けられており、写字僧たちは原本を求めて、修道院から修道院へと渡り歩くこともあり、こうして得られた原本の筆写に一年かかることもありました。貴重図書は鎖本として持ち運びができないようにしました。当然、転記ミスはあったことでしょう。写本同士の異同研究が発生します。

グーテンベルクが発明した印刷文字は写本であった聖書文字の影響を多分に受けて、あのようなゴシック書体ができたのだといわれています。

▼校正はいかにして誤字、脱字を回避するかです。記載ミス、転記ミス、変換ミス、数字ミス・・・まだまだあります。大学入試問題で毎年ミスが発見され、新聞で報道されます。スーパーの表示が1個168円なのか、1袋168円なのか、不思議な数字もあります。厚生労働省の不正統計問題は校正の問題ではなさそうです。

▼自分の生きざまを校正しようか。無理ですね。陰の声です。

(奥羽大学図書館長)